

審査講評 日本水大賞委員会 審査部会長 虫明功臣

日本水大賞審査部会より、第9回（2007年）「日本水大賞」への応募状況ならびに審査・選考の経過についてご報告申し上げます。審査部会は、日本水大賞委員会のもとに各賞の候補を選考するために設けられており、水環境・水資源・水文化・水防災等の分野の専門家や学識経験者18名で構成されています。審査は、「日本水大賞」募集要項に記された「対象の範囲」および「審査基準」を基に進められました。各賞の候補となった活動は、日本水大賞委員会に報告され、審議の結果、“大賞（グランプリ）”をはじめとする日本水大賞の各賞が決定されました。

応募状況：

今回の応募総数は昨年とほぼ同じ160件で、地域別に見ると、石川、奈良、広島、高知、佐賀の5県を除く42都道府県から応募がありました。一昨年までの200台の応募には至りませんでした。地域に根ざしたユニークな活動が各地で展開され深化していることを心強く感じます。活動主体別に見ると、各主体別の割合は昨年と大きな変化はなく、団体が64%、個人が16%、学校が15%、企業と行政がそれぞれ2.5%となっています。活動分野別では、例年と同様に、水環境に係わる件数が最も多く半分以上を占めており、次いで、水文化、水資源、水防災の順になっています。

審査結果：各賞の受賞者と活動名称および審査講評を以下に示します。

*大賞<グランプリ>：神奈川県 向上高等学校・生物部

「静かなる侵入者 外来種タイワンシジミから考え、行動する水辺の環境保全活動」

それまでの「種の多様性調査」において在来種マシジミと誤って同定されていた可能性のある外来種タイワンシジミの生息を1999年に学校近くの水路で確認して以来、神奈川・山梨両県の相模川全流域における広範囲で地道なシジミ類の分布調査の実施によって、タイワンシジミが広く分布しているいっぽうで在来種マシジミは絶滅の危機にあること、ならびにタイワンシジミの拡大の原因を突き止めたことが、まず貴重な科学的業績です。その上に、在来種マシジミの保護を目指して、専門家等とも連携し他の道県の内水面試験場等と情報交換しながら「全国シジミネットワーク」を構築し、タイワンシジミに関する情報の全国的な収集と発信に繋がるとともに、専門研究者と協力して、マシジミとタイワンシジミの判別を確実にできるDNA分析手法の開発を進めつつあることが、社会的活動として高く評価され、グランプリにふさわしいと判断されました。

*国土交通大臣賞：山形県 米沢中央高等学校・科学部

「河川環境資源の活用と地域活性化に向けた活動（最上川流域において）」

1969年から40年近くにわたる最上川水系の詳細な水質調査（現在：本流137地点と支流55）の継続が、まず賞賛に値します。1993年からは夏季に最上川上流から河口まで3泊4日で子供から高齢者の幅広い年齢層をゴムボートに乗せて水質調査と河川景観・舟運遺構調査を兼ねた川下りを行い、河川に対する関心を喚起しています。また、2005年からは水質の変遷と現状を分かり易く冊子に纏めて県内各地に広く情報発信することにより、河川環境改善へ向けての取り組みに科学的データを提供するとともに、支流域住民の最上川流域全体としての交流・連携意識の発揚に貢献していることが高く評価されました。

*環境大臣賞：宮城県 非特定営利法人 田んぼ

「ふゆみずたんぼを利用した環境と暮らしの再生プロジェクト」

田んぼに豊かな生物を呼び戻し、国の天然記念物マガン類の生息域を拡大する「ふゆみずたんぼ（冬季湛水水田）」の水鳥保全効果、生物多様性再生効果、有機農法技術としての有効性などを専門研究機関や団体と連携して実証調査を進めながら、燕栗沼周辺でその普及に着実な実績を上げていることは、ラムサール条約の登録に応える素晴らしい取り組みです。また、この地域で得られた科学的データや営農の経験を全国に発信して、この自然共生型農法の適用の支援を行うとともに、国際的な視野を持って世界の米作地帯との情報交流を始めるなど、幅広い実践活動が高く評価されました。

***厚生労働大臣賞：兵庫県 加古川グリーンシティ防災会**

「水の環から人の輪へ ∞ 命をつなぐ防災井戸 ∞」

阪神淡路大震災時の「飲料水不足」と「トイレ用水不足」の教訓を生かして、マンションの防災組織が自らの計画と資金で非常時用の井戸を建設し、地域の自主防災力の向上と維持に励んでいる活動は、地域防災の優れたモデルです。この防災井戸はマンション住民だけでなく周辺地区住民にも開かれた利用を想定し、普段、井戸と周辺の水場は子供からお年寄りを含めて地域交流の場として維持・運用されています。これは、まさに水と防災をテーマとした地域コミュニティづくり活動として高く評価されました。

***農林水産大臣賞：兵庫県 県立播磨農業高等学校 稲作研究班**

「田園空間ネットワーク！～「日本酒づくりで播磨の自然を育む農法」の取り組みについて～」

田園空間の動植物の減少は農村の地域力の減退であるとの認識のもとに、12年の長期にわたり、アイガモ水稲同時作や米ぬか抑草による有機農法に取り組むとともに、ため池や河川の水質調査や水生動植物調査、そして絶滅危惧種ベッコウトンボや稀少水草ミズトラノウの増殖や「たんぼの学校」などの環境保全啓蒙活動を地道に続けています。これに加えて、地元の酒造メーカーと提携して有機農法で作った酒造好適米を使った地域ブランドの酒の製造と販売に結び付けた点が、農村の環境保全と経済活性化との両立を目指す啓発的な試みとして高く評価されました。

***文部科学大臣賞：京都府 府立桂高等学校・草花クラブ／東亜システムプロダクツ(株)／(有)笹井製作所**

「水(共)に生きる！ ～暑くなる日本の環境を守る高校生と企業の挑戦～」

昨年のストックホルム青少年水大賞での準グランプリ獲得に止まらず、受賞対象となった植物の超節水型苗生産技術のアイデアについて、企業と連携し、社会への貢献、実用化に向けてさらに発展させている姿勢が、高校の域を超えた産学連携活動と賞賛されます。特に、バイオマスを原料とする無覆土芝マットの導入や循環型灌水などを取り入れた「簡易薄層屋上緑化システム」の開発は、実用性の高い都市の環境改善技術として期待されると評価されました。

***経済産業大臣賞：今回は、残念ながら該当がありませんでした。**

***市民活動賞（読売新聞社賞）：愛知県 特定非営利活動法人 堀川まちネット**

「名古屋市堀川の埋もれた水文化の復興と継承活動による地域づくり」

藩政時代から続いて1973年以降中断していた、「まきわら船」を浮かべて堀川の浄化を願う「堀川まつり」の復興に1985年から取り組み、この河川文化を継承する若い世代をも巻き込んで2005年には祭りの目玉「大まきわら船」を32年振りに再興させた活動、ならびに地域の行政や学校等とも共同して河川の清掃に取り組んできた活動が、今後の河川の浄化とまちづくりに繋がり、ますます発展することを期待します。

***国際貢献賞：千葉県 上総掘りをつたえる会**

「先人の知恵「上総掘り」を海外へ（生活用水確保のための井戸掘り）」

千葉県君津地方で考案された深井戸掘削の伝統技術「上総掘り」を継承し、アジア途上国、特にフィリピンの上水供給が進んでいない地域を中心にこの技術を適用して安全な水の確保に資すると同時に、現地のボランティアグループへの技術移転に実績を上げている活動は、草の根の国際協力、市民レベルの国際貢献として賞賛されます。

***奨励賞：**

・宮城県 県石巻工業高等学校・天文物理部

「桃生地方の海の環境を工業技術で守る」

海岸に山積みされたり、海に不法投棄されて、地域の環境問題となっている水産廃棄物（カキやホヤの殻、マヒトデなど）に注目し、それらを有効利用するための技術開発に取り組んで成果を上げていることが、評価されました。今後の実用化に期待します。

・宮城県 佐々木 久雄

「大型海藻アカモクを利用した水環境の修復活動」

松島湾の富栄養化対策として大型海草アカモクの再生が有効であることに着目し、その養殖・増殖技術と機能性食品としての商品化等の本格的研究によって、藻場再生の実現性の見通しをつけたことが、評価されました。現在取り組んでいる藻場の造成へ向けての漁協、企業、行政等を巻き込んだ実践活動が、実を結ぶことを期待します。

・東京都 隅田川市民交流実行委員会

「白魚が棲み、子ども達が遊び泳げる清流『隅田川』の再生」

20年以上の長期にわたり、隅田川市民サミットの開催、機関紙や情報誌の刊行・出版、地域の歴史・文化の研究や水域の各種環境調査など、幅広い活動内容を継続してきたことが、評価され、今後の活動の発展も期待されます。

・三重県 自然史教育談話会

「汽水域のヨシ群落に生息する絶滅危惧種ヒヌマイトトンボの保全活動」

絶滅危惧種「ヒヌマイトトンボ」の生息環境について研究例が乏しい中で、その生態学的調査やヨシ群落の調査、汽水域の水環境調査などの系統的な調査研究を基に新たな生息地「保全ゾーン」の創出に成功した実績が、評価されました。このミティゲーション手法がさらに発展することを期待します。

審査部会特別賞：

・東京都 小島 貞男

「安全でおいしい水を市民に」

安全でおいしい水の供給に向けての技術開発とその実現において国内の水道界をリードしてきた経験のもとに、晩年は世界各地の開発途上国でそれぞれの自然条件や社会・経済・文化条件に適合した浄水システムの普及と技術改良の指導に絶大な貢献をしてきた実績が、評価されました。

・京都府 鴨川を美しくする会

「鴨川納涼・鴨川茶店・鴨川クリーンハイク・鴨川の水質、水生昆虫実態調査・河川環境学習他」

鴨川に対する環境保全意識を啓発・維持することを目的として、37年の長期にわたり、納涼（夏）、茶店（春）、クリーンハイク（秋）、河川パトロールなど、いずれも河川美化活動を伴うイベントの開催、小・中学生を中心とした水質や水生昆虫調査、環境教育等、多彩な活動を継続し成果を上げてきたことが、評価されました。

・熊本県 財団法人 肥後の水資源愛護基金

「肥後の水資源愛護賞」顕彰活動

“水資源の保全への関心と実践活動への喚起を促す”という顕彰活動の趣旨は、「日本水大賞」と類似しています。水大賞創設の10年以上前から肥後地域を対象として、肥後銀行の役職員と一部の定年職員からの募金を主とする活動資金をもとに、こうした顕彰活動と水保全関連のイベントの開催を継続している点が、評価されました。

水問題の改善や解決には、“Think globally, act locally”すなわち「広域からの影響と同時に広域への影響を考えて、ローカルな活動を実行する」ことが不可欠です。選に漏れた活動を含めて全国各地で大勢の方々が、地域に根ざし創意工夫に富んだ活動、熱意に満ちた活動、地道に継続している活動、など、など、多彩・多様な水に係わる活動を広く行っておられることは、安全で美しい国土の形成に繋がるものと確信します。特に今回、次代を担う高校生の活動が多く、賞を獲得したのは嬉しい限りです。皆様のご努力に敬意を表しますとともに、活動のますますの発展と深化を祈念して、講評の締めと致します。

2007年度 審査講評 日本ストックホルム青少年水大賞審査部会長 千賀裕太郎

昨年の世界大会で「準グランプリ」の快挙

昨年「日本ストックホルム青少年水大賞」を受賞した「京都府立桂高等学校草花クラブ」の代表杉本直美さんはじめ3名が、2006年8月ストックホルムで開催された「ストックホルム青少年水大賞」世界大会に日本代表として29カ国から参加した代表に混じって参加し、中国代表がグランプリ、日本代表とスリランカ代表が準グランプリを受賞しました。日本代表には、名誉総裁のスウェーデン王国皇太子ビクトリア王女より準グランプリの賞状が授与されました。これは日本代表として2004年の沖縄県立宮古農林高等学校のグランプリ受賞に次ぐ快挙です。あらためて日本をはじめアジア地域の若者の「水」への問題意識と研究レベルの高さを世界にアピールしました。

審査経緯：

本年は、過去最高の23件(21校)の応募がありました。審査は、水部門の専門家5人からなる審査部会において、ストックホルム青少年水大賞世界大会の審査基準に従って、厳正に行われました。この審査基準は、テーマの妥当性(水環境がかかえる重要な問題に的確に取り組んでいるか)、創造性(問題提起や問題解決の方法、実験・調査やデータ解析の方法に創造性がみられるか)、方法論(明確な問題意識のもと作業計画が適切であるか)、テーマに関する知識(既往研究のレビュー、参考文献、情報源、用語の理解が十分か)の4項目からなります。

審査は2段階で行われました。まず審査員がそれぞれの専門的見地から行った書面審査の結果を持ちよって審議して上位4チームを選びました。次にこの4チームからパワーポイントを用いたプレゼンテーションを聴取したうえで質疑を行い、慎重な協議を経てグランプリ及び審査部会特別賞候補を選定し、これをもとに日本水大賞委員会において授賞が最終決定されたものです。

審査結果：

ストックホルム青少年水大賞日本代表に輝いたのは、大阪府の清風高等学校生物部(木村論史、辻井悠稀)及び関西大倉高等学校(松葉成生)チームの「キンタイを救う“池干し”の謎—ニッポンバラタナゴの産卵床となるドブガイの繁殖に影響を及ぼす伝統的な“池干し”の効果—」です。両校の3人は、絶滅危惧種のニッポンバラタナゴ保護活動の一環として、その生息環境である灌漑用の「ため池」に着目して生態学的調査を行い、伝統的な池の維持管理作業の一環として毎年秋に行われる「池干し(池の水を放流して池を空にする)」が、溜まったヘドロを除去して底泥を酸化状態にすることでニッポンバラタナゴの産卵床となるドブガイの繁殖条件を与えていることを発見しました。この成果は、日本ばかりでなく多くの稲作灌漑用のため池があるアジアモンスーン地域の国々に共通する伝統的な農業生産活動が、水域の汚染対策と生態系保全に結びついていることを科学的に解明した、国際的にもきわめて意義のある知見です。ストックホルム世界大会においてしっかりとプレゼンテーションを行えば、必ず高い評価を得られるものと、心から期待しております。

審査部会特別賞として、岩手県立盛岡農業高等学校生物工学科サクラソウ研究班(加藤慶太、浦田聖、徳江平)の「SAVE THE RIVER SIDE「—絶滅危惧種『サクラソウ』の増殖と保護の研究を通し水環境の保全を考える—」」を選びました。日本で水辺の春を象徴する花として古くから親しまれ、しかし今日では水辺生態系の悪化から絶滅危惧種とされているサクラソウは、その栽培自体が容易ではなく、まして培養は困難とされてきましたが、自然環境条件の科学的観察と詳細な実験の積み重ねが実って、「水中カット法」、「エアチャージ培養法」及び「土寄せ法」からなる一連の培養手法の開発に成功しました。よって本研究を審査部会特別賞として表彰することといたしました。今後、サクラソウの自生と実際の河川水質・水量との関係を明確にし、実際の河川においてサクラソウの自生環境を再生する研究へと発展させることが期待されます。

最後に、本日受賞された皆さんはもちろんのこと、惜しくも受賞にいたらなかった高校チームの、熱心に研究活動を行った生徒の皆さん、そして優れたご指導をされた教員の皆様に、審査員一同心からの敬意を表明して審査講評といたします。